

2025年11月30日 説教「地には平和をとは」

ルカの福音書 12章 49～53節

神の国を求める事、宝を天に積む事、目を覚ましている事などを教えられたイエスは、前段においては、忠実な賢い管理人のたとえを通して、主の再臨を忠実に待つ信仰を示してくださいました。

1. 火が燃えることを (49節)

①地に火を (49) 「わたしが来たのは、地に火を投げ込むためです。」

激しいお言葉です。主イエスは、「地に火を剥ぎ込むために」来られたというのです。バプテスマのヨハネは、主イエスについて自分よりも力ある方であり、「その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。」(マタイ 3:12)と伝えました。「火」は何かを燃やす力を持ちます。火は聖霊の働きです。そして、その火は審判をももたらすものです。ここでの「火」は恵みをもたらし、罪をも明らかにするのです。

②火が燃えていたらと (49) 「その火が燃えていたらと、どんなに願っていることでしょう。」

それでは聖霊の火は燃えているのでしょうか。イエスは「燃えていたらと、どんなに願っていることでしょう」と言われていますから、その時点では燃えていないということになります。使徒の働き2章にある、聖霊降臨の出来事は聖霊の火が燃えだし、恵みが広がり出したことを示していると考えられます。

2. イエス・キリストの問題提起 (50～51節)

①イエス・キリストが受ける苦しみ (50) 「しかし、わたしには受けるバプテスマがあります。それが成し遂げられるまでは、どんなに苦しむことでしょう。」

後からみれば、聖霊降臨があるのはわかるのですが、そこに至るまでは大きな出来事を経なければならないのです。イエスは言われます。「わたしには受けるバプテスマがあります」。ここでのバプテスマとは十字架という大きな痛みです。主イエスは十字架を受けるご覚悟をもって「バプテスマ」と言われているのです。しかし、そこに至るまでは幾重にもわたるところのご苦難があるのです。それはすでに始まっています。パリサイ人や律法学者などの責め立てがあり、それらはついには十字架への道をもたらすことになるのです。

②平和を与えるためにか (51) 「あなたがたは、地に平和を与えるためにわたしが来たと思っているのですか。」

この問題提起は強烈です。「キリストこそ私たちの平和である」(エペソ 2:14)とありますが、ここで主イエスは、「地に平和を与えるために、わたしが来たと思っているのですか」と弟子達に問われています。「神はイエス・キリストによって、平和を宣べ伝え」(使徒 10:36)ともあります。イエス・キリストを伝えることは、すなわち、イエス・キリストが平和の主であることは間違いないのにこのお言葉はどういう意味なのでしょうか

③分裂を (51) 「そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ分裂です。」

さらにお言葉のパンチは増して行きます。平和ではなく、「むしろ分裂です。」と言われるので。祈祷会で第一コリントを読んでいますが、コリントの教会の分裂分派騒ぎがたしなめられていますが、そのような分裂も主からですか。それは明らかに違いましょう。教会の人々の身勝手、自己中心、自己主張などが分裂をもたらしていたのです。それでは、主イエスはここで何を言わんとしているのでしょうか。疑問が募ります。

3. 主人 (52~53 節)

①家族さえも (52) 「今から、一家五人は、三人がふたりに、ふたりが三人に対抗して別れるようになります。」

主のお言葉は、思いつきではありません。分裂について、さらに具体的に話しが進められたのです。一家が五人いるとします。そのうち、三人と二人が角を突き合わせる。二人が三人に敵愾心を燃やすなどということがあるというのです。それも家族の中においてです。

②対抗する家族 (53) 「父が息子に、息子が父に対抗し、母は娘に、娘は母に対抗し、しゅうとめは嫁に、嫁はしゅうとめに対抗して別れるようになります。」

話しあるに具体的になります。父が息子に対して、息子が父に対して対抗するというのです。さらに、母は娘に、娘は母に対して対抗するというのです。また、嫁はしゅうとめに対抗するとも。親子間の対立。様々な場合があります。親への恨みを持つ子供、こんな子に育てたつもりはなかったと思う親。考えてみれば、あのイサクの妻リベカはヤコブをひいきにし、ヤコブが長子の権を奪うのに加担し、結果としてヤコブは遠くの地に逃れ両親やエサウとも会えないこともあります。他にも例はたくさんあります。しかし、それらは、人間の罪から出たものでした。ところが、今朝の話は、主イエスが分裂をもたらすという話なのです。いったいどういうことなのでしょうか。

《展開と結論》

今朝の聖書箇所を読んで、「イエス様なぜですか」と問う人もあるでしょう。この聖書箇所に躊躇いた人も知っています。イエス・キリストはどうしてこんなにひどいことを言うのかと言ふ人もいました。論語のなかに、「礼の用は和を貴しと為す」(1:12)という言葉があります。礼の働きとしては調和が良いといった意味です。ところが、ここで主イエスは、「地に平和を与えるためではなく、むしろ分裂を与えるためである」といって、家族の分裂まで述べられているのです。「父と母を敬え」と十戒の教えとどのように整合性があるのかといった思いを持つ方もいるでしょう。

イエス・キリスト御自身、「平和をつくる者は幸いです」(マタイ 5:9)と教えられています。また、イエスが誕生した時には、天の軍勢が神を以下のようにた賛美しました。「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように」(ルカ 2:14)。平和はキリストの福音の基調でもあるのです。今週は 2025 年、第一回目のアドベント礼拝ですから、平和の主を高らかに宣言したいところですが、導かれた聖書箇所はここでした。しかし、ここにこそ福音の大切なメッセージがあるのです。

キリストの福音は犠牲の愛を示していますが、愛の主キリストに従うことも教えています。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、わたしについて来なさい」(ルカの福音書 9:23)。ここに、キリストについていく道と、キリストに背を向けて歩むという二つの道が生じます。自分がキリストに従う道をとった時に、家族のだれかが別の道をとれば、そこには一致ではなく、不協和が生まれることもあるでしょう。相違が生まれることは当然です。和を貴しとしますが、主の福音はさらに貴しとしなければならないのです。また、この聖書箇所が、国際間の争いを容認していることにはならないことは言うまでもありません。

私は高校二年生のクリスマスに洗礼を受けました。福音についてはよく理解していました。そこで、生活も考え方も以前のまま、友人とあまりぶつかることはありませんでした。しかし、福音に目覚めて、主の前に悔い改めてキリストに従う道を選びました。卒業し、高校時代の仲間が集合することになった時に、皆の前で証しをしたのですが、「キリスト教に武装された梶川は魅力がない」と言わってしまいました。その後、その仲間たちとは、親しくすることはできなくなってしまいました。一方、多くのクリスチヤンと知り合うことになり、福音の恵みをたくさん知るようになりました。私がクリスチヤンとして成長するために、高校時代の友人たちとの交流が薄くなるという犠牲を経なければなりませんでした。もっとも、数十年経って、その友人達と再会し、福音を含め、現在を伝えることができました。

キリストは平和の主です。クリスマスは平和の主を喜ぶ時もあります。しかし、キリストによる真の平和は、十字架の福音に基づきます。キリストが私達の罪のために、身代わりとなって死んでくださったという福音にこそ、真の平和があるのです。それは人間に基づくものではありません。「彼らは、平安がないのに、『平安だ』と言っている。」(エレミヤ 6:14)とありますが、揺るぎない平和は、キリストの十字架と復活の福音以外からはもたらされないので。その福音に立つ時に、たとい一時的に衝突するようなことがあったとしても、うろたえる必要はありません。なぜなら、真の平和の主であるイエス・キリストがあなたと共にいてくださるからです。そして、平和の主は「二つのものを一つにし、隔ての壁をうちこわし、敵意を廃棄してくださる」(エペソ 2:14, 15)のです。真の平和を与えてくださる主イエス・キリストに信頼していきましょう。また、今年も喜ばしい、平和の主を待ち望むアドベントとしていきましょう。